

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



時間観念の歴史

コレージュ・ド・フランス講義 1902-1903年度

アンリ・ベルクソン著

藤田尚志・平井靖史・岡嶋隆佑・木山裕登 訳

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水

SAMPLE

Shoshi-Shinsui.com

Henri BERGSON

HISTOIRE DE L'IDEÉ DE TEMPS
Cours au Collège de France 1902-1903

Édition établie, annotée et présentée par Camille RIQUIER,
sous la direction scientifique de Frédéric WORMS

©PRESSES UNIVERSITAIRES DE FRANCE, 2016

This book is published in Japan by arrangement with
PRESSES UNIVERSITAIRES DE FRANCE,
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

目次

凡例（訳者） 15

校訂者序 カミニュ・リキエ 17

第1講

相対的な知と絶対的な知 一九〇二年一二月五日

第一の例——英語の発音とフランス人学習者 227

第二の例——絶対運動と相対運動 228

第三の例——小説家と登場人物 30

第四の例——生命活動と生物学者 32

内側から知るか、外側から知るか 33

単純なものと複合されたもの 36

四つの例に即した「無限」概念の検討 38

第2講

記号による知 一九〇二年一二月一二日

42

記号とは何か（第一の一般的事例——外国語の発音） 42

第一の特徴——一般性 44

第二の特徴——行動誘導性 45

第三の特徴——固定性 46

第二の物理的事例——運動と軌跡 48

第三的心理的事例——登場人物と描写 52

第四の生命的事例——進化論とダーウィニズム 55

26

第3講

一般観念の起源

一九〇二年一二月一九日 59

SA
SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第4講

概念と時間

一九〇二年一二月二六日 75

- 記号の三つの本質的特徴 一般性・行動誘導性・固定性
概念における行動誘導性と固定性 61
理念化された心理学の弊害 63
自然に反する努力としての哲学 65
一般と抽象の循環 66
中間的イメージによる解決とその問題 68
行動誘導性による解決 69

59

第5講

ギリシア哲学と精確さ

一九〇三年一月九日 75

92

- 一般観念の生物学的基礎 75
実在の新規性に対する概念の原理的困難 75
知的拡張の努力としての直観 81
運動と概念的表象 83
持続と概念的表象 86
反論への応答（一）二重の記号性 87
反論への応答（二）ダーウィンについて 90

101

SAMPLE
Shoshi-Shiritsu.com

第6講

プラトンの時間論

一九〇三年一月一六日

107

- 『ティマイオス』の時間論 107
第一の観点——イデア論 109
第二の観点——神話 114
プラトン対話篇の年代学 115
イデア論の問題とその解決 118

第7講

アリストテレス 一九〇三年二月二二三日

121

- プラトンからアリストテレスへ 121
両者の共通点——形相とイデア 122
アリストテレスによるプラトン哲学の再構成——神話の排除 123
アリストテレスにおける形相と質料 129
形相の減少としての変化 131

第8講

アリストテレスの運動論 一九〇三年一月三〇日

130

- アリストテレスにおける運動 136
アリストテレスにおける神 142
二つの永遠——純粹形相と純粹質料 144
第一の動者と思考の思考 147

第9講

場所論から時間論へ 一九〇三年二月六日

150

- 『自然学』第四卷 150
アリストテレスの場所論 151

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

アリストテレスの時間論
時間と魂 一九二〇年

第10講

アリストテレスの時間論 一九〇三年二月一三日 一九一〇

- イデア論と形相論 一九一五
プラトンとアリストテレスの時間論 一九一六
両者の相違 一九一九
アリストテレスにおける神と世界 一九一七
本講義の観点から見た古代哲学 一九一八

第11講

プロティノス哲学への導入 一九〇三年二月二〇日 一九一

- プラトン、アリストテレスの時間論 一九一
プロティノス哲学の中核をなすもの 一九二
三人の哲学者において進展する一つの思考 一九二
プロティノスとアンモニオス 一九三
プロティノスと東洋思想・ユダヤ教・キリスト教 一九四
プロティノスによる哲学のかつてない進展 一九五
意識理論のプロティノス的原理 一九六

第12講

プロティノスの意識論 一九〇三年二月二七日 一九五

- プロティノスが提示する三つの觀点 一九五
一般的觀点——隨伴（パラコルーテーンス） 一九六
第一の特殊的觀点——共感（シュナイステーンス） 一九七
プロティノスと現代心理学 一九八
第二の特殊的觀点——把握（アンティレーブシス） 一九九

SAMPLE
Shoshi-shinsuu.com

二つの観点はいかにして交わるか
転落とは何か

209

220

第13講

プロティノスの時間論

一九〇三年三月一三日

212

- 第一の暫定的観点——神話的・精神的観点（相互浸透）
212
- 第二の最終的観点——神秘的・物理的観点（分割・分散）
215
- 二つの観点の収束、一方から他方への自然な移行
217
- 心理学者プロティノス
219
- 第一の神話的観点から見た時間の発生
221
- 第二の形而上学的観点から見た時間の発生
223
- 光の円錐とその諸断面による物質界の発生
226

第14講

プロティノスの自由論

一九〇三年三月二〇日

230

- はじめに——古代哲学の決定的な問題
230
- 時間と自由——プロティノスによる問題提起
234
- 自由への反論——因果法則とエネルギー保存則
234
- 第一の観点——因果法則を曲げる魂の内的エネルギー
237
- 第二の観点——予定調和的反復
241
- 第三の観点——必然性なしし可知性との合致
244
- おわりに——自由の三つの段階
246

第15講

近世哲学への移行

一九〇三年三月二七日

248

- 意識の内的持続とその実在
248
- 事物の持続とその実在
250
- 二つの実在を分かつ本性の差異
252

SAMPLE Shoshihi.com

第16講

近世の哲学と科学における「無限小」革命 一九〇三年四月三日

263

- 古代哲学の根底にある運動についてのヴィジョン——ベネデッティ
ルネサンス以降の運動のヴィジョン——ベネデッティ 263
運動の数学的記法——ガリレオ 268
二つの無限小理解——空間の否定的觀点と持続的肯定的觀点
無限小理解の革命はいつ生じたのか——カヴァリエリ 273
線の形而上学——ガリレオ、ロベルヴァル、パロー 275
計算の形而上学——ニュートン 277

第17講

デカルト的直観 一九〇三年四月二十四日 280

- デカルト哲学に内在する二つの傾向——直観と体系の精神 280
第一の傾向——直観的精神（懷疑の対象と時間における行為としてのコギト）
280
古代哲学とデカルト哲学における「思考する私」と「ある」について
286
第二の傾向——体系の精神（不連続なものとしての時間と神）
286
デカルト自然学の真価——物質の実在性としての運動 290
290

第18講

ライプニッツの時間論 一九〇三年五月一日 296

- デカルト哲学の古代哲学化としてのスピノザ・ライプニッツ
宇宙の「複合」を表象する二つの方法——原子論とモナド論
ライプニッツとプロティノスの親縁性 302
302

SAMPLE Shiroishi.com

第一の相違点——神は眞の発生原理か、万物照応の説明原理か 304
第二の相違点——存在論的二元論か、認識論的三元論か 305
ライプニッツの時間論（一）等質的時間批判 308
ライプニッツの時間論（二）持続概念 310

第19講

カントの空間論・時間論 一九〇三年五月八日 315
古代哲学からルネサンス哲学へ（講義前半のまとめ） 315
二つの道——持続・直観・動性の科学と普遍学 317
デカルトとライプニッツ（講義後半のまとめ） 319
デカルトの神、ライプニッツの予定調和、カントの超越論的統覚 320
カントにおける空間と時間 320
総括と来年度の見通し 327

補遺

講義要約（レオナール・コノスタン） 329

一一九〇一一九〇二年度講義 「時間の觀念」 329
二一九〇二一一九〇三年度講義 「時間觀念の歴史」 334

注

341

訳者解説 平井靖史 410
訳者あとがき 藤田尚志 427
人名（学派名） 索引 446

SAMPLE Shoshi-Shinsei.com

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

時間觀念の歴史

コレージュ・ド・フランス講義

一九〇二—一九〇三年度

凡例

本書は、Henri Bergson, *Histoire de l'idée de temps. Cours au Collège de France 1902-1903*, édition établie, annotée et présentée par Camille Riquier, sous la direction scientifique de Frédéric Worms, Paris : PUF, 2016, 395 p. の全訳である。詳細は「訳者あとがき」に譲つ、(ナハ)では原則のみを記す。

- 〔 〕は校訂者による補綴。〔 〕は訳者による補足。()は基本的に原綴りを明示するために用いられていくが(フラ
ンス語・ギリシア語は通常態。英語やラテン語などそれ以外の言語および著作・雑誌名はイタリック)、文意を取りやすく
するための日本語表現の工夫として用いられている場合もある。引用和文中の中略は(…)で示した。
- 詳細な目次、各講のタイトル、小見出し、四五・一二二六頁以外の図はすべて、読者の便宜を考えた、訳者による追加ない
し改修である。図・画像がわれわれの追加したものである場合、その都度注記した。
- 読み上げ原稿のない講義の速記という本講義録の性格上、文章には繰り返しや間投詞、感嘆符など口語固有の表現がかな
り多い。翻訳として妥当な範囲で簡素化を心掛けた。意味のある言い換えの場合ももちろん残してある。
- 校訂者リキエは校訂方針を明示していないが、綴りや句読点の打ち方に至るまでタイプ原稿を再現するという立場を選択
しているように思われる。速記者・校訂者の判断が解釈上の誤りであると思われたケースは注記し、翻訳をそれにあわせ
て変更した。その際、本書の原書刊行の翌年(一〇一七年)に発表されたシルヴァン・マットンの批判的書評の指摘を可
能な限り取り入れた。指摘・修正がマットンによるものか、訳者によるものかもその都度明確にしてある。
- 本講義録の半分以上を占めるギリシア哲学に関する部分の翻訳について。(1)ベルクソンは基本的にはその場で原典から
逐語訳している。したがって講義の原文中には(以下プロティノスを例にとる)、プロティノスのギリシア語とベルクソン
による逐語訳が記されている。これに対し、リキエは補足として、プロティノスのケースなら、フランスで比較的広く
流通していたブレイエ版の翻訳を注に付している。本書では、それらに加えて、邦訳『プロティノス全集』の該当部分も

- 併記するにした。特にアロティノスでは誤の揺れ幅が大きく、マルクソンによる解釈が何をどのように切り取ってあるかが少しでも精緻に読み取れるようにとの配慮からである。(2) リキエはギリシア語の単語や引用が登場するたびに、ラテン文字による翻字・文字転記 (translittération) を併記しているが、本訳書ではカットした。
- 原書の注と訳者の注は通し番号を振って巻末に掲載し、訳者の注は冒頭に【訳注】と記して区別した。原書本文に対する編者の注には通し番号が振られており、原書の当該頁との大まかな対応が取れるようとの配慮から、本訳書では注の末尾にこの編者注番号を「[*1]」～「[*534]」の形で残してある。
- マルクソンの著作の略号は次の通り。なお、邦訳に原著の対応頁数の記載がないDIとECに関しては、邦訳書の頁数も添べた。

- DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience* (1889), éd. Arnaud Bouaniche (AB), Paris: PUF, coll. « Quadrige », 2007, 322 p.『意識に直接与えられたものについての試論』、合田正人・平井靖史訳、*ムード学芸文庫*、110011年。
- DS: *Les Deux Sources de la morale et de la religion* (1932), éd. Frédéric Keck (FK) et Ghislain Waterlot (GW), Paris: PUF, coll. « Quadrige », 2008, 708 p.『道德と宗教の二つの源泉 I・II』、森口美都男訳、*ムード学芸文庫*、110011年。
- EC: *L'Évolution créatrice* (1907), éd. Arnaud François (AF), Paris: PUF, coll. « Quadrige », 2007, 696 p.『創造的進化』、田中人・松井久訳、*ムード学芸文庫*、110011年。
- ES: *L'Énergie spirituelle* (1919), éd. Elié During (ED), AF: Stéphane Madelrieux (SM), CR: GSB et GW, Paris: PUF, coll. « Quadrige », 2009, 508 p.『精神のエネルギー』、原章一訳、平凡社ライカム、110011年。
- « IM »: « Introduction à la métaphysique » (1903)・「形而上学入門」、『思考と動き』所収。
- M: *Mélanges*, éd. André Robinet, PUF, 1972, 1720 p.『雑著』(日本社版『マルクソン全集』第八・九巻に一部翻訳あり)。
- MM: *Matière et mémoire* (1896), éd. Camille Riquier (CR), Paris: PUF, coll. « Quadrige », 2008, 521 p.『物質と記憶』、熊野純彦訳、和波文庫、110011年。
- PM: *La Pensée et le Mouvant* (1934), éd. AB, Anthony Feneuil, AF: Frédéric Fruteau de Lacroix, SM, Claire Marin, CR et GW, Paris: PUF, coll. « Quadrige », 2009, 612 p.『思想と動き』、原章一訳、平凡社ライカム、110011年。

校訂者序

カミーユ・リキエ

コレージュ・ド・フランスにおいて一九〇二—一九〇三年度に行なわれたものの、これまで未刊であつた^{*1}、「時間観念の歴史」に関する本講義は、今後フランス大学出版局〔PUFの略称で知られるフランスの著名な出版社〕から刊行予定の、ベルクソンの講義録の新たなシリーズの冒頭を飾るものである。ベルクソンの死去から七五年が経ち、哲学的著作以外のいかなるものも、草稿ないし草稿の一部も、書簡も、「それについて誰かがノートをとつたかもしだれず、あるいは私自身がメモを書いたかもしだれぬ」^{*2} 講義や講演も刊行してはならぬという厳格な禁止の形で彼が表明した遺志から逃れて、年を追うごとに、彼の書いたものや発言の死後刊行が行われるようになつてきている。すでに彼の死後八年目の一九四九年には、ベルクソンからアルベル・アデス (Albert Adès)^{*3}への書簡と、アデスがその当時（一九一八年に）刊行した論文にベルクソンが手書きで書き込んだメモの刊行によつて、最初の逸脱が行われた。しかしながら、當時「一九九〇年」の遺言執行者であったアンリ・グイエ^{*4}がベルクソンの講義録の刊行を許可するまでには一九九〇年を待たねばならなかつた。

そうしてアンリ・ユードの手によつて、PUFの「エピメテウス」叢書 (collection « Epiméthée ») から四巻の講義録が出版された。それらと部分的に重なるところもある三冊の講義録が別のところから刊行された^{*5}。ベルクソンが高校（クレルモン＝フェラン）で、あるいはカーニュのクラスで（パリ、アンリ四世高校）教鞭をとつていたときの講義である。それらの講義録の哲学的価値や、ましてそれらが読者に委ねられるに至つた理由を疑問視するのではないが、それらの価値や、それらがベルクソンの教義そのものと取り結ぶ関係を問おうとする読者にとって議論は開かれたままである^{*6}。議論は二つの極端な立場のあいだで揺れ動いている。一方には、講義録はベルクソンの著作へと導き入れてくれるであろう隠された鍵を握つていると信じる、ありそもない立場があり、他方には逆に、学説と講義録のあいだにはいかなる関係も見ないという立場がある。後者の立場をとる人々は、ベルクソンがジャン・ギトント^{*7}にしたとされる打ち明け話をおそらくは覚えているの

だろう。「人がうまく教育できるのは、調査・研究といった個人的な仕事を題材とはしていない場合のみであり、伝統的な真理、デカルトの言うような、大部分の賢人たちの意見が一致している諸々の真理を与えるような題材の場合のみである」*8。

ベルクソンは、従うべきアカデミックなプログラムや課されたテーマに忠実であったということは認めなおこう。そして仮に、ある観念やある著者について説明する機会に、たまたまそれらに関する幾つかのコメントが同時に、構築されつつある彼自身の独創的な思想を推測させるということはあるたにしても、ベルクソンは、これもまたギトンに打ち明けていたように、「教育に必要とされる教条主義と、〔講義内容の〕^{フレンシ}縁のところでの示唆とを」*9 そんな風に組み合わせていたというわけで、開陳していた、古典的な著述家たちや哲学的諸潮流に関する知識にすぎなかつたのである。

本書に収められた講義はその限りではない。一つならずの理由で例外的な地位を有しており、歴史的な次元を有していると言つても過言ではあるまい。というのも、この講義録のおかげではじめて、同時代人たちによつて非常にしばしば描写されてきた、コレージュ・ド・フランスにおけるベルクソンの伝説の内実へと分け入ることができるからだ。その伝説とは、「ベルクソンのすぐ前に」「同じ教室で講義をしていた高名な経済学者」ルロワ・ボーリュー氏（Paul Leroy-Beaulieu）を驚かせることに始まり、その後パリの名士たちを講義に惹きつけることになつたある教授「ベルクソン」の伝説である。ルロワ・ボーリュー氏は「日頃はほとんど空の講堂が、奇跡的に、見たこともない数の群衆で満たされるのを見た。それはソルボンヌの学生たちやサンリ・シュルピスの僧侶たちであつた。彼らは、あの哲学者の講義の席を確保するために、「前の講義から出席して」気の毒にも一時間のあいだ、盲人の横で「施しを得るために」椀を咥えた犬のような、善良な氏の相貌を見つめ続けねばならなかつたのである。あるいはまた、形而上学に夢中になつた社交界の女性たちのために席取りをしに来た哀れな男たちや家僕たちもいた」*10。今日公刊されるこれらの講義はただ単に、一九三〇年代まで続く「ベルクソンの栄光」のはじまりを画するというばかりではなく、それ以上にその「源泉」である。というのも、これらの講義によつて、そしてまづもつてそれらのおかげで、実際「フランスには、ベルクソン哲学があらゆる文化を彩つた一時期があつた」*11からだ。コレージュ・ド・フランス講義は、書かれた作品——それが生み落とされた世界よりも生き永らえ、主として死後にもたらされたスピリチュアル的な栄光に包まれて独自の閃光で輝くものとして、ベルクソンはひたすら著作に固執した——と、口頭での教育——

そこから彼の思想が世界へと差し込まれ、一定期間、多くの人々によって受容されることになり、人間ベルクソンに束の間の栄光をもたらしたもの——とのあいだの深淵を飛び越える連結符をなしている。これらの講義はまた、かつてないほどベルクソンの思考を中心として凝縮されたものであり、その思考の理解に新たに特異な光をもたらす「第一の特権」とともに、専門的な研究の輪を越えてより広汎に輝きを放つことで、これまで同様、哲学にあまり縁のない聴衆に届くようになり、哲学そのものに興味を向けさせることはできなくとも、彼の著作に関心をもたせるに至る「第二の特権」という二重の特権を有しているのである。

まず言わねばならないことは、これらの講義がベルクソンの諸著作とかなり密接な連関をもつているということである。もちろん著作だけが、厳密な教義を保証する唯一のものであり続け、作品だけで自足せねばならないことにはいささかの疑いもない。だが、これらの講義は、著作と別のことを言っているわけではないとしても、別の仕方で言っている。時に著作の言葉をまとめ、しばしばそれらに伴う言葉を発し、やがて著作に記されることになる言葉を準備するのに役立っている。実際、そこかしこに見られる著作への慎ましやかな目配せは、難解な著作を書いて大学人の狭いグループ内で読まれ議論される地味な研究者と、見る見るうちに増えていった大勢の聴衆を魅了する有名な教授とを分けたがる人々を反駁するには十分である。「高校教師ベルクソンは必ずしもベルクソン主義者ではなかつた」し、そうあることを拒絶してすらいた。だが、一九〇〇年にコレージュ・ド・フランスでシャルル・レヴェック^{*12}の後を襲つてからは、講義においてまでも、ベルクソンはベルクソン主義者となつた。つまり、ベルクソンの教育は、ますます広汎な聴衆に向かって広がっていくと同時に、絶えずより自由でより個性的な言葉に向かってひたすら発展していくことである。一九〇四年のガブリエル・タルド^{*13}の死に際して、ギリシア・ローマ哲学講座を離れ、現代哲学講座を担当することを望んだベルクソンが、異動願を実現させるべく主張した理由はひとえに、教育と個人的な仕事の「双方を可能なかぎり密接に」^{*14}結びつけたい、というものであった。あちらで「教育者として」話し、こちらで「学者として」書いているのは、まったく同じ一人の人間であり、哲学の本を書く以外の何事もせず、名声を求めたわけでも、まして望みすらせらず、日増しに有名になってしまったのは、同じシルクハット、同じ黒のフロックコート、黒ネクタイ、飾り気のない真っ直ぐのフォーマル「取り外し可能な襟」を身につけた人物であつた。「この慎みのない流行」に嫌気がさし、とタンクレード・ド・ヴィザン^{*15}は書いている、「何度周囲の人々に、「ベルクソンは」この野次馬の殺到について愚痴をこぼし、ギリシア人たちの秘教的な「仲間内の」教育のことを羨ましがつたこ

とか」*16。「ベルクソン自身そのような教育を行なつていなかつたわけではなく」実際には、同時にずっと行なつていて土曜日の演習は、金曜日の講義に比べれば、はるかに聴衆は少なかつた。したがつて、仮にベルクソンが「コレージュ「・ド・フランス」ですらも、現在進行中の研究から講義の直接の主題を引き出さないことを格率」*17としていたにせよ、その格率が含んでいる以上の制限「つまり講義録を出版しないという制限」を加える必要はないし、ベルクソンが、少なくともコレージュでは、自身の過去の研究から講義の直接の主題を、あるいは、現在の研究から間接的な主題を引き出していたことを認めればよいのである。

- 「一九〇〇—一九〇一年度講義「原因の觀念」〔演習 アフロディシアスのアレクサンドロス『運命論』〕
- 「一九〇一—一九〇二年度講義「時間の觀念」〔演習 プロティノス『エネアデス』第六卷第九編〕
- 「一九〇二—一九〇三年度講義「諸体系との關係における時間觀念の歴史」〔本書〕〔演習 アリストテレス『形而上学』第一二卷〕
- 「一九〇三—一九〇四年度講義「記憶の諸理論の歴史」〔演習 アリストテレス『形而上学』第一二卷〕
- 「一九〇四—一九〇五年度講義「自由の問題の進展」〔演習 ハーバート・スベンサー『第一原理』〕
- 「一九〇五—一九〇六年度休講（代講はクーチュラ）」
- 「一九〇六—一九〇七年度講義「意志の諸理論」〔演習 ハーバート・スベンサー『心理学原理』の幾つかの章〕
- 「一九〇七—一九〇八年度講義「一般觀念」〔演習 バークリ『人知原理論』〕
- 「一九〇八—一九〇九年度講義「精神の本性および思考と脳活動の關係」〔演習 バークリ『サイリス』〕
- 〔一九〇九—一九一〇年度休講（代講はヴァルムス）〕
- 「一九一〇—一九一一年度講義「人格性」〔演習 スピノザ『知性改善論』〕
- 「一九一一—一九一二年度講義「進化の觀念」〔演習 スピノザ哲学の一般的原理〕
- 〔一九一二—一九一三年度休講〕
- 「一九一三—一九一四年度講義「哲学的方法について、概念と直觀」〔演習 スピノザ哲学の一般的原理〕

さらに言えば、これらの講義は、著作の一部を成すものではないものの、著作と無縁のものでもなく、ここに刊行される

講義「本書」の諸特徴の一つは、著作において繰り返し何度も引用されているということである。『精神のエネルギー』所収の論文「生きている人のまぼろし」と「心靈研究」において、ベルクソンは、「ギリシア人たちによる「精確さ」の発明」に關して、「コレージュ・ド・フランスで教授したさまざまな講義、とりわけ一九〇二年と一九〇三年の講義において立ち入った説明を加え」^{*18} たと述べていて。また彼は、『創造的進化』第四章を次のような注記から始めている。「本章の諸体系の歴史、とりわけギリシア哲学を扱っている部分は、一九〇〇年から一九〇四年にかけて、コレージュ・ド・フランスの講義、とりわけ「時間觀念の歴史」（一九〇二—一九〇三年度）『本書』に関する講義において、じっくりと展開した議論のきわめて手短な要約にすぎない」^{*19}。以上から、コレージュで行なわれた講義は、実質的に『創造的進化』の執筆を後押ししたのであり、したがつて逆にこの著作を解明する手助けにもなりうる、と信じてよいであろう。非常にしばしば、ベルクソンが後に著作においてシンプルな表現でまとめてしまふことを、講義は詳述していたりするからだ。主要な部分に関して言えば、本講義は、著作には見られない息遣いと、時に著作以上の精確さで、ベルクソンが『創造的進化』の『原書』三一三頁から三六三頁〔邦訳三九七頁から四五六頁〕にかけて書くであろうことを取り上げている。講義が著作の代わりになることは決してないが、本講義は、講義が著作に伴走することがあり、場合によつては、筆致の簡潔さゆえに複数の解釈に委ねられてしまつたあれこれの一節に与えるべき意味を裏付けてくれることがあると、他のどの講義よりもよく示してくれる。

さらに、本講義を読んで諸々の重要な発見をすることは可能であろうが、そのうちでも最も重要な発見を一つ挙げねばならないとしたら、それは、ベルクソンが形而上学の歴史においてプロティノス哲学に与えている重要性であろう。一九〇七年の著作にはほとんど欠けているものの、本講義のおかげで、ベルクソンがプロティノス哲学への言及を消し去つたのは、検討したさまざま偉大な諸体系の總体を読み解きうるプリズムとしてよりよく用いるためでしかないと気づかれるだろう。こうしてプラトン、アリストテレス、スピノザ、あるいはライピニッツの背後で、プロティノスが形而上学に対してきつぱりと与えた体系的統一性を見出すことは、本講義が私たちに提案してくれる哲学史の大きな独創性である^{*20}。ベルクソンが各々の哲学体系のうちに自らを導き入れる精確さは説得力に満ちており、それぞれの講義では、『創造的進化』（第四章の副題はまさに「諸体系の歴史への一瞥」である）において見慣れていたあの視線の高さに加えて、「偉大な哲学者たちの」諸テクストの解説や注解のディテールが加わる。ひとたび形而上学の新プラトン主義的な詮解が徹底して復元されるや、ベルクソン的批判の努力は、数年後にハイデガーによつて試みられる努力——彼はヘーゲル哲学から出発して形而上学の存在神論

的な構造を引き出すことになる——と比肩されるようなものとなることはいさきかの疑いもない。

だが、この講義の特異性はそれだけにとどまらない。というのも、学説に忠実に引き絞った形で示されているだけでなく、この講義はまた、専門家たちの輪をはるかに超えて展開され、それを耳にし得る者なら誰の琴線にも触れるものだからである。実際この講義録は、手の施しようもなく失われてしまったと思い込んでいた哲学者の自由な肉声を、あの人間の思考の殿堂「コレージュ・ド・フランス」の中で一世紀以上前に響いていたほぼそのままの姿で、読むことを可能にし、聞かせてくれる。この講義を読むと、ベルクソンの遺志に背いているというよりも、時間の免がたい法を束の間破っているという奇妙な印象に襲われる。すでにこの講義の痕跡は幾つか残っている。例えば、ジャック・シュヴァリエ²¹の本はその表れである²²、さらに精確なものとしては、一九〇四年一月に『哲学雑誌』(Revue de philosophie)に発表された要約がある²³。だが、それは過ぎ去った出来事によつて残された埃にすぎなかつた。もはや存在せず、語り継がれてきた諸々の証言によつてどれほど力があつたのかを推し量るしかない声の遠い反響にすぎなかつた。思考の内的な流れとの接触を失わず、辛抱強くその流れを辿れるように、「完全に自分自身の内側に向けられた眼差し」²⁴とともに、「ベルクソンはノートもなく、いかなるメモもなしに、小さなハンカチをいじつたり、手を組んだりしながら、話していた」²⁵。もしまだ「未刊の」痕跡がどこかにあるとしても、それは聴講者たちの手になるものでしかなく、実際まもなく刊行が予定されている他の講義はそういったケースである。だが、本講義で聞かれるのは、これから行われる講義のように、言つてみれば完全に復元された声なのだ。時間の流れを遡り、すでに起こった出来事を、それが奔出した時そのままに生き直したい。そんな私たちのファウスト的欲望を、この講義は見事に過不足なく満足させてくれるかのようなのである。

実際、講義の筆写の厳密さを再度強調しておかねばなるまい。一言一句違わぬことが目指されており、今日これに匹敵するものと言えど、録音による筆写しかない。私たちはこの記録をシャルル・ペギー²⁶の忠誠心に負つてゐる。聴講者なら誰でも、袖なしマントを羽織つた彼の姿をベルクソンの講義で見かけないことはなかつた。ペギーがノートを取つていたといふわけではない。彼は何物にも代えがたい、源泉そのものを飲み干すのに忙しく、まったく取つていなかつた。今日二つの講義が欠けるところなく完全に保存されており²⁷、他にも部分的に保存された講義が二つ存在している²⁸のは、ペギーが病に倒れ、出来事そのものに可能なかぎり近い代用品が必要になつたからである。生徒たちのノートでは、ベルクソンの誰にも真似しがたい声や文体を再現し、生成しつつある思考が迸り出てくる地点をその源泉において捉えることは不可能であつ

ただろう。それにペギー自身も認めていたよう、彼は「著者の輪郭と思考をその一番最初の表れにおいて捉え、もし読み上げ原稿があるのであれば、それ自体の秘密を冒す」という明らかな偏愛をもっていたが、それは彼の目からすれば、「形而上学的な深み」^{*29}を帶びた偏愛であつた。そのような情熱をもつた者は、とペギーは続けている、「著作がそこで源泉から分かれてくる歴史のあの地点に」身を移し入れようと望む者である。彼は、「この最初の発出において直接、じかに天才の秘密を取り押さえる」^{*30}ことを望んだのであつた。したがつてペギーは、自分自身が出席できないときには、「法廷で」宣誓した「公認」速記者であるラウールとフェルナンのコルコス兄弟^{*31}を躊躇うことなく送り込んで、代わりにベルクソンの講義を聴講させ速記させた。彼らの速記はかなり長いあいだ、幾つかの段ボール箱の中で忘れ去られていた。ペギー家の手からそれらを受け取つたアンドレ・ドゥヴォーによつて速記録がドゥーセ文庫（Fonds Doucet）に委託されたのはたかだか一九九七年のことにして、タイプ原稿の形で保存され、同一型の三つの赤い箱に目録も付されずに収められていたので、それらを調査するには、その存在を知つてゐる必要があつた。

この速記録の価値は計り知れないものがある。といふのも、ペギーが自分自身のために望んでいたものを、この筆写は与え返そうとしているからである。最も忠実に、厳密に復元されたベルクソンの講義を読みながら、ペギーが望んでいたことは、書かれたものの塵灰の下に「ベルクソン」教授の声の抑揚までも聞き取ることであつた。顔以上に記憶にとどまるあの独特の声は、「ベルクソンの語ることすべて」に、「何物にも代えがたいあの個人的な印象」^{*32}を与えていた。講義において、言葉〔語〕よりもはるかによく通じるものがある。それは調子であり、存在感や話し方であり、リズムであり、それらを越えて伝えられる生命そのものにほかならない動きである。ベルクソンの教育を記憶し、自らも私たちにベルクソンの音の肖像を残したペギーは、その言葉のうちにベルクソンの人となりを描き出したが、ペギーが探し求めていたのは、ベルクソンの語る内容よりも、彼がそれを語るシンプルな語り方のほうであつた。「彼は講演のあいだじゅう、完璧に、確実に、疲れも知らず、飽くなき細心の厳密さをもつて語つていて。一見ひ弱な印象は絶え間なく打ち消され、彼特有の大胆で、新しく、深い繊細さをもつて、抜かりなく、しかしながらかかる気取りもなく、言葉を紡ぎ、文を紡ぎ、けれど決してある観念を、それがいかに重要なものであろうとも、いかに深く革命的なものであろうとも、並べ立てひけらかそうとはしなかつた」^{*33}。ベルクソンの講義のもう一人の熱心な聴講者であったジョルジュ・ソレル^{*34}もまた同様に、「ベルクソンの学説の傾向をよく知つて、その著書を理解するためには、ベルクソン本人の肉声を聞くことがどれほど有益であるか」^{*35}に気づい

ていた。

それゆえ、この講義の中には、生きた言葉に起因する「他の講義とは」違った何かがあるに違いない。講義で人間ベルクソンの声を聞いた後で、著作を読むよう多くの人々がいるのも道理だと領げる何かが、「ベルクソンの著作が私に理解させ、感じさせてくれなかつたものも」とシュヴァリエは語つてゐる。「人間ベルクソンとの接触、そして彼の言葉が私にそれを明かしてくれました」³⁶。「この講義録によつて」可能なかぎり著作との関係・話し言葉との関係を取り戻すチャンスが与えられる。つまり、私たちが連綿と行なつてきた読解の「経年によつてこびりついた」垢が、誤つて著作をあまりに身近にしてしまう前に、ベルクソンの考え方、それがみずみずしく開花してくる瞬間に捉えるチャンスが与えられるのである。というのも、聴くこととは反対に、眼差しは、読むという行為のうちでなされる眼差しですからも、私たちがいつも「ベルクソンの著作」分かつてゐるわけではなかつたということを、あまりにも早く忘れさせてしまつからだ。そしてペギーは、コルコス兄弟をベルクソンの講義に送り込んだのみならず、社会党の党大会や国会の討論「つまり生きた言葉で激論が交わされる場」に送り込んだ張本人であつてみれば、なまの魅力を完全に復元し尽くすには、速記された報告にまだ何が欠けているのかということをすべて誰よりもよく分かつていていた。「アクセント、調子、身振り、声の力、響き、そして聞こえてくるものだけでなく、輪郭も、眼差しも、背丈も、頭の座りも、そして肩幅も、体全体が「速記録には欠けてゐる」。もし話し言葉を、速記された報告から、それが話されたままに、生き返らせることを望むのであれば、繊細な聽力と極度の慎重さもまた必要となる。なぜなら速記録は「聞こえることも、聞こえないことも、見えるものも、なされることも、よく感じ取れるものも、漠然と感じられることも、予感されることも、そのすべてを」³⁷与え返すことはできないからである。

にもかかわらず、これらの講義をめぐつて巻き起つた前例のない熱狂は、私たちに思い出させてくれる。ある哲学者が、その学説によつてラベリングされた一つの名称になつてしまつ前に、生前から、現代という時間がいづれ安眠をかき乱しにやつてくるのをおとなしく待ちながら、彼が図書館にやがて占めることになる場所に還元されてしまふわけではない、といふことを。彼は、書き物が未だ捉えきつていなかつた一人の人間であり、一つの声であった。その声は、人が耳を傾けたくなるものである以上、本性そのものからして、人の心を乱すものであつた。五〇年後、同じ場所で、自身が遠い後継者となつたベルクソンの名声を想起しつつ、今度はモーリス・メルロ・ポンティが、哲学の役割に言及することになる。哲学

の役割とは、ある声が決然と大声で話し始め、それを聞きに来る者たちを自分に惹きつけようとして、「それ 자체は途方もなく、ほんと耐え難い」^{*38}ものを窒息させることで、「本の形になつてしまふ前に、呼び止めることである。実際、読みたいくと思う本を探しに行くのは私たちだが、必ずしも求めたわけでもないのに、私たちにまで達し、私たちに届くのは話ば話し言葉である。私たちが時に著書から離れることがあっても、著書へと私たちを連れ戻してくれるのはまたしてもあの話し言葉なのだ。この講義がそれに成功するのは間違いない。

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

第1講 相対的な知と絶対的な知

一九〇二年一二月五日

みなさん、私たちは昨年、時間に関するいくつかの見方をお示ししました。今年は昨年の講義を継続し、諸体系の歴史を通して、この時間観念を追つていくことにしましよう*³⁹。

まずは、昨年の講義で提示した諸觀念のうちのいくつかに立ち戻り、最初の二、三回の講義でそれらを取り上げ直しておるものも、おそらく無駄ではないでしょう。その際、私たちは昨年とはいさきか異なる觀点に立つことにします。というのは、昨年の講義では脈絡なく散在していた諸觀念を二、三の点に可能な限り収斂させようと思っているからです。それは、哲学的な諸教説の歴史の中で光を当てるのが不可欠であるように思われる諸点です。そのような歴史においては通常、曖昧な諸觀念を目撃の当たりにすることになります。それらの觀念は諸体系に応じて多様な、両義的な形のもとに姿を現すのですし、私たちにとって形而上学一般的な問題である時間の觀念を解明するのはきわめて困難なことであるからです。絶対・相対・無限・有限・形而上学・科学といった、私たちがこれから絶えず出会うことになる語の意味について、もう少しだけ精確な觀念をもつことから始めるのでなければ、異なる諸体系のうちで時間觀念を解明するのは困難なままでしょう。というのも、続く講義で見ていくことになりますが、ある体系の説明を收斂させうるのは、いつも持続の問題の上にであるにもかかわらず、絶対・相対・完了・未完了といった語がうまく規定されず、両義的であることに起因する困難や曖昧さにいつも行く手を阻まれているからです*⁴⁰。

ですから私はこの初回の講義を、昨年私たちが身を置いていた觀点に立ちつつ、形而上学的根本的・本質的な諸々の語を明らかにすることに、可能なかぎり費やしたいと思います。繰り返しますが、可能なかぎり昨年の諸觀点を取り上げ直し、根本的な諸觀念の定義のためにそれらを用いたいと思います。もしよろしければ、可能なかぎり単純で親しみやすい幾つかの例を取り上げることにしましよう。

第一の例——英語の発音とフランス人学習者

今私が、発音が難しいある外国语、例えば英語の発音を学びたいのだとしましよう。どう取りかかればよいでしょうか。異なる二つのやり方があります。発音の教科書を手に取ることもできるでしょう。そこでは、アルファベットの文字という手段で英語の発音が形象化されていて、フランス人がそれを発音するような仕方で発音されるに違いありません。このときは、英語の発音のよく知られた形での形象化の前にいることになり、もしその教科書がよくできたものであれば、そして私がその種の勉強に励むなら、外国語としては十分な、だいたい合っている発音に達することができるでしょう。その国に行つて話せば、注意すれば理解してもらえるような発音です。注意すれば、というのは、結局のところ私は英語の発音を、フランス語を通して、フランス語にあわせて、フランス語に即して学んだ以上、相手は最初耳にしたとき、私がフランス語を話していると思い込むであらうからです。このとき私は、英語の発音について相対的な知をもつていることになるでしょう。

絶対的な知をもつためには何が必要でしようか。イギリスに赴き、イギリス人たちと暮らし、イギリスの暮らしを送り、英語の発音の流れに身を浸すのでなければなりません。そうすれば、同じことを同じ発音を、たやすく違った仕方で学ぶことになります。諸々の音を作り出すために、諸々の要素や文字と一緒に複合するといった作業に関わり合う必要はなくなります。文字に文字を重ね、シラブルにシラブルを重ね、言葉に言葉を重ねることはありません。そうではなく、おそらくはフレーズから始めることでしよう。心のうちに、いやむしろ耳のうちに、あの音楽のようなもの、あるいはむしろあのメロペー「古代ギリシア劇の序唱部」のような実際に発音された英語の話し言葉をもち、そのうえで総体から細部へと移っていくでしょう。フレーズから語へ、語からシラブルへ、シラブルから文字へと達するでしょう。こういったすべては総体のうちにしかと存在するのですが、言ってみればその中に溺れてしまっているのであって、この発音のうちに与えられるもの、それは全体であり総体であり、繰り返せば、それは或る種の音楽なのです。

この場合、私のもつている英語についての知はフランス語に即したものではなく、英語自身に即した英語の知をもつているのであり、つまり、英語の発音に関して絶対的で、相対的でない知をもつていていることになるでしょう。これが、私たちに相対的に知ることと絶対的に知ることの違いをありのままに擡ませてくれる、きわめて単純な例です。相対的に知ること、

第2講　記号による知　一九〇二年一二月一二日

記号とは何か（第一の一般的事例——外国語の発音）

みなさん、前回の講義で私は、純粹に相対的な、すなわち外側からの知と、内的な知、私たちが仮に（あえて言えば相対的に）絶対的なものと呼んでいたものに到達するとのできる知とのあいだに、区別の線を引こうと試みたのでした。そして、その講義の終わりがけに、これら二つの知のうちで、二つ目のものは、事物そのものに到達する、ないし到達することを目指すものであって、それに對して、第一のものは、記号や表徵による知であると申し上げました。本日私が詳しくお話ししたいのは、この記号という観念についてです。

記号の一般的な特徴はどのようなものであるか。記号という観念のうちに何が含意されているのか。記号のうちに必ずや見出されるものは何であるのか。それを一緒に探していくことに致しましよう。私たちがもはや記号ではなく、意味される事物の諸特徴を何とか積極的に規定しようと望むなら、このような研究は不可欠です。それらの諸特徴は、記号のそれとは反対のものであることが分かるでしょう。そこから実在的なものについてのある考え方がくっきりと表れてきます。それは持続についてのある考え方であり、時間の諸理論の研究にとりかかるにあたって、可能なかぎり精確なやり方で引き出すことが必要であるように思われる一定の結論です。

では、記号というものの特徴とは何でしょうか。前回取り上げた四つの例を取り上げ直すことにしましよう。これらの例を私たちが偶然に選んだわけではなく、まさしくそこからありとあらゆる記号に共通のものを引き出すために、可能なかぎり異なるものを取り上げたのでした。それでは、第一の例を取り上げ直します。覚えておいででしょうが、外国語の発音が問題となっていたのでした。

第3講 一般観念の起源

一九〇二年二月一九日

記号の三つの本質的特徴——一般性・行動誘導性・固定性

みなさん、前回私たちは、記号一般の諸特徴を規定しようと試み、それらの特長を三つの本質的な特徴にまとめてみたのでした。そのときお話ししていたのは、記号とは本質的に、一般的なものであるということです。実際、記号は何かを意味しなければなりません。記号である以上、私たちがそれまでに知っている言語のうちで、仮定により私たちの知らない何かを表現しなければならないはずです。統いて、既知のものと未知のものとに共通の側面を表象しなければなりません。それはつまり、記号が表現する対象に固有の、特別なものを表現することはできないということです。したがって記号は、その起源からして、一般性の要素を含んでいるのであって、この一般性の要素、それこそ記号がある種の内在的なエネルギーによつて、ますます一般的になつていく傾向をもつ、その力なのだ、そういうお話をしておりました。発展していく記号の進展のうちには、一般性への進歩があります。これが第一点です。

第二点は次のようなものでした。あらゆる記号は、多かれ少なかれ行動への呼びかけです。私たちには、記号と意味されたものしか見ないようにする傾向を強くもつており、それはあらゆる知的プロセスにおいてそうなのです。出発点と到着点ははつきりと見ているのですが、途中の移行のメカニズムにはあまり興味もなければ、それを気にかけることもなく、一般的に言えば、それを見て取るのははるかに難しいものなのです。「もちろん」いつもそうとは限りません。少なくともある程度まではこの法則から逃れるような、純粹に科学的な次元の記号があるということは私も認めます。

一般的に、記号と意味される物とのあいだにあるものこそ、主要なものであり、最も重大な働きです。それは、可能な行動への呼びかけであり、私たちが現実的にせよ潜在的にせよ、行なつてあるある種の態度決定であり、それなしでは記号は

第4講 概念と時間

一九〇二年一二月二六日

一般観念の生物学的基礎

みなさん、前回私たちは、概念、すなはち一般的で単純で抽象的な観念が、信じられている以上に控えめで、慎ましい——概念の役割は何よりもまず思弁的な役割であると思われていてることを考慮に入れるならば、そういうことになるでしょう——起源をもつてることを明らかにしました。概念の、抽象的で一般的な観念の形成メカニズムを説明するのには、概念というものがただ思弁的で利害関係を離れた役割しかもっていないとする、つまり、概念とは認識の道具、知るための道具であって、知るために知る手段であるとすると、きわめて難しいことであると申し上げておりました。そして、このことについて私たちが与えていた主要な理由は次のようなものでした。

「そうした考えが正しいとすれば」すべてがすべてと似通うことになり、すべてはすべてと区別されることになります。知覚される事物がいかなるものであれ、知覚される質がいかなるものであれ、一般性の系列を十分に高くまで登っていくなら、それら相互のあいだにはいつも類似が見出されるでしょうし、個別化 (spécification) の系列と呼びうるものを十分に低くまで降りていくと、いつも差異が見出されることになるでしょう。事物を、それらが知覚に提示されるままに受け取るとすると、これとあれでなく、これとこれを一緒にグループ化し、それらに対して、心理学者が言うところの、組み合わせ・抽象化・一般化の作用が実行されるいかなる理由もありません。幾つかの対象ないし質を互いに比較し、そこから類似を引き出してくる、そうした比較が前提しているのは、集められる諸対象のあいだには、すでに何らかの共通のものが把握されていましたとすることです。ところで、もし共通のものが把握されていたのであれば、もはやそれを探し求める理由はありません。「もしそうしてしまえば」人は悪循環に陥ってしまい、そこから抜け出そうと、狭義の一般化以前に、種々の対象や種々の質が互い

第5講 ギリシア哲学と精確さ

一九〇三年一月九日

精確さの発明者としてのギリシア人

みなさん、本講義のイントロダクションとしての役割を担つた最初の数回の講義では、記号一般の本性と特徴に関する研究によって、続いて、昨年度の時間観念に関する本講義で述べたことの要約によって、時間、持続とは、その本性そのものからして、記号による表現には最も適さないものであり、記号的表象から最も逃れ去るものであるということを示そうとしたのでした。持続を表象するためには、或る努力が必要です。それによつて、思考の働きの傾向に逆らうことができるのです。思考するとは、語の習慣的な意味では、幾つかの概念から、つまり幾つかの記号から出発して、記号によつて、現実を迎えて行くことです。思考するとは、語の通常の意味では、現実に対して、すでに出来上がつた、前もつて定式化された一定数の問い合わせ立てることです。それは、不動のもののうちに、安定したものの中に、既知なるもの^{*9}のうちに身を安らげることであり、過ぎ去る現実を待ち構え、通りすがりにそれを捉えることです。

ですが、そうだとすると、運動は、つまり時間は、持続は逃れ去ります。そしてこの実在をしつかりと捉えたいと望むのであれば、十分に時間と持続を表象しようと望むのであれば、適用しなければならないのは、逆の方法です。自然の傾向に逆らいつつ、思考の働きの習慣的な方向を転倒させ、方向転換させつつ、一挙に運動のうちに、持続するもののうちに身を置くように——たとえその後で、道筋の道標「マイルストーン」となる諸概念と道すがらふたたび出会うことになるとしても、です——試みなければならぬのです。したがつて、時間がひとたび内的努力によつて、意識によつて捉えられるや、時間から諸概念へと私たちは移行することができるのです。ですが、概念から時間へと移行するいかなる手段もありません^{*9}。その結果、諸概念の中に腰を据え、概念を認識の唯一の手段とするような哲学は、時間を逃れ去るままに放置し、時間を無